

ぶどうの木

第 24 号



基督伝道隊

八幡前田教会
大濠公園教会
戸畑教会

目 次

卷頭言		榎本利三郎 …… 1
旅の思い出		小松 南子 …… 2
無題		津留崎浩行 …… 4
三回目のOB会		久保田宮子 …… 6
永遠の課題（奢は三年の費）		緒方とみ子 …… 7
故佐藤雄二兄追悼文集に対する感謝		伊規須太郎 …… 9
「夢」		上野 米子 …… 10
永遠の命		高木ツルエ …… 12
我が思い出（六）旧満州（現中国）編		
		鈴木 一幹 …… 14
		小松 南子 …… 21
		I K S …… 24
		貞 頼子 …… 25
		榎本 和義 …… 27
		廣田 寿 …… 31
		野村美恵子 …… 31
		九月十六日 記念会と感謝
		野村美恵子 …… 31
		【特集】 てがみ …… 33

巻 頭 言

榎 本 利 三 郎

主の祝福は人を富ませる、

主はこれになんの悲しきをも加えない。

(箴言一〇章二三節)

「ぶどうの木」も二十四号迄、主の恵みで成長させて頂きました。毎年、多くの美味豊かな果実を結んで
樂しませて頂きました。

今年も、様々な味を持った果実が沢山できました。

一粒一粒がそれぞれの味があり、色も熟度も形も大小様々で楽しいものです。
ゆつくり味わい、新しい感謝、讚美の果実を、主の聖前に備えたいものです。

旅の思い出

小松南子

『あなたは神と和らいで、平安を得るがよい。そうすれば幸福があなたに来るでしょう。』

(ヨブ記三二・二二)

主の御愛と憐れみによつて、静かな平安の日々を過ごさせていただき、感謝にたえません。

この静かな平和の生活を思うとき、主人が三十三年間中小企業の経営に携わり、景気の善し悪しに左右されながらの波乱の毎日でしたが、主の恵みと憐れみによつて日々主に守られ、六十歳を迎える時、もう働くだけ働いたので自由になつて自分の生活と願い、年金生活をさせていただくようになつて早六年の歳月がすぎました。

六年の間に、主人の願いでありました、車で日本中を旅するのも、もう五万キロを超えました。

主の恵みによつて今日まで何の事故もトラブルもなく、何時もよいお天気にも恵まれ、思い出の多い旅行をさせていただきました。

その中で、特に忘れることのできない思い出がございます。

それは平成六年十月三十一日、紅葉を見ながら横浜の娘の所への旅の道中のことです。大山く出石く小浜く東尋坊く宇

奈月く妙高く志賀高原く草津く軽井沢く横浜の予定でした。

紅葉した山々を楽しみながら中国道を走り大山へ。大南山壁は、白、紅、緑の三段層で、樹海のトンネルは赤く染まり、鏡ヶ成では山一面が七色に色づき、現実を忘れてしまうほどの美しさで、特に夕刻は茜色の空と紅葉の美しさが一体化しおとぎの国にいるようでした。

二日目は大山を八時半に出発し、湯村温泉でお昼を過ごし、主人の故郷出石へ。

三日目は、舞鶴、小浜、福井、東尋坊の日本海の厳しい荒海の風景を見て感動し、黒部宇奈月、四時着。

四日目早朝、黒部溪谷トロッコ電車に乗って見る、溪谷の厳しさ美しさ、また登って行くほどに美しくなる紅葉。ただ主をほめたたえて感嘆の声を発しておりました。

上越上杉春日山城址、林泉寺を見て、妙高高原三時半着。

妙高では、美しく紅葉した山が一夜にして雪をかぶり、それが朝日をあびて美しく輝く姿は、言葉では言い尽くすことはできません。その美しい雪が、私の一番の思い出を作ってくれました。

それは、五日目に志賀高原を通過して草津へ行く時のことです。妙高山に別れを告げ、リンゴ園を通過して志賀高原に向かっているとき、「渋峠チェーン使用」と標示が出ています。

主人は、「しまった。昨夜もしやと思っていたがやはり…

チェーンを持ってくるべきだった。」

九州を出発するときは暑い日が続き、雪など思いもしないことでした。考え、迷いながら車は走ります。「主よ、み旨を教えてください。このまま進むべきでしょうか、引き返すべきでしょうか。予定が変わりますが、主のみ旨に従います」何時ものように説教テープが流れています。(旅行する時は早朝にテープを聞きながら旅行をしております。)

『あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ。』

(イザヤ五五・六)

主人は、地元の方々に状況を聞いております。人によつて色々言われることが違い、私達はいよいよ迷うばかりです。

テープの聖言を味わっていると、今こそ主を知る恵みの時だと思われまます。行くだけ行つてみましょうよ。もしだめな時は引き返しましょうよ。「主よ、共にいてお守りください」と祈つておりました。心を決めると周りの景色が美しくなりました。人一人いない志賀高原。夏、冬となれば若者でにぎわっているのでしょうか。

車のスピードを一〇〜一五キロくらいに落として新雪の道を登ります。白一色の雪景色、美しい樹氷、冬山の静寂、小雪が舞います。テープから讚美歌が流れています。まるで天国に向かっているようです。不安も恐れもなく、ただ、

美しい、美しいと叫んでおりました。

いつのまにか、横平山二一七二坪の洗峠を通過して白根山にたどりついておりました。草津を見下ろしながら、今までのことがまるで夢のようです。私達が死を迎える時、恐れや不安の中、主が共にいてすべてを清めて下さって、美しい天国へ導いて下さるのだから。丁度今体験させていだいた様に。心から感謝しながら山を下り草津へ。浅間山鬼押し出し浅間園へ。一七八三年、浅間山の大噴火で北側へ流出した溶岩流は幅三キロ、長さ六キロにわたるそうです。自然の恐ろしさを感じました。

軽井沢では、標高千メートルの高さで、赤、黄、緑の葉がキラキラと入り乱れ、色彩のシンフォニーを奏でているようでした。また、旧軽井沢の三笠通りではカラマツ並木が美しく、もみの木並木通りの教会を見ながら万平ホテルへ。

六日目、小諸追分宿により、昔の人々の旅を感じさせていだき、現代の旅行を感謝しながら横浜へ。

帰りは御殿場から富士山新五合目まで登り、白糸の滝を見て京都へ。京都の秋を満喫させていただき、無事帰宅することができました。

今度の旅行は、自然の美しさ、優しさ、厳しさ、恐ろしさ、また天国まで見せていだき、この万物を創造された主を崇めるとともに、このような偉大な神様が、無きに等しい小さ

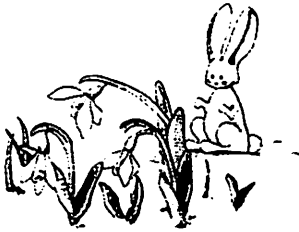
な者を目にとめていただいているということに、驚きと喜びで、感謝でいっぱいでございます。

『人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、人の子は何者なので、これを顧みられるのですか。』

(詩篇八・四)

『ヤコブの神をおのが助けとし、その望みをおのが神、主におく人はさいわいである。』

主は天と地と、海と、その中にあるあらゆるものを造りとこしえに眞実を守り、…』 (詩篇一四六・五)



無 題

津留崎 浩 行

どなたでも、その時その時に応じて、心に響く聖言、聖書の個所があたりだと思えます。私にも、この所ずっと強い慰め、喜びと感謝の泉となつて私を支えてくれる聖書の一文があります。それは、ヨハネ黙示録二二章三〜四節の聖言です。

『見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとつて下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである。』

私はこの所を読むたびに、心が踊る思いがいたします。この二二章、二二章は、天国のことを神様がヨハネを通して示して下さいましたかと思えますが、同時に、主の血によつて購われ、主と共に甦らされた私共信者が、この地上で天国の雛型の毎日を送らせていただけたことを実感させて下さいます。

特に、二二章三〜四節は、主の恵みの手にすっぽりと落ち込んだ者の、喜びと感謝の叫びと言うこともできます。

人生の幸いは、まさにこの二節の聖言に尽きると思えます。『神の幕屋が人と共にあり、…』

何とすばらしいことでしょうか。

『神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐい

取ってください。…』

何という幸いでしょうか。

しかもこの聖言は、現実となつて、私共の毎日の中に生き生きと働いて下さっているのです。

私共の周りには、愛する夫、妻、肉親…を亡くされて、悲しみや悔恨の思いに苦しんでおられる方を多く見かけます。

世間一般では皆そうだと思います。しかし、日頃から主に導かれ、主との交わりの中を歩いて来られた同信の方々が、父親を召され、御主人を天国に送られたあと、涙もなく、むしろ上よりの慰めに感謝の毎日を送っておられるお姿を見るにつけ、またお話を聞くにつけ、神様が聖言どおりのことをやって下さったなど、感謝の思いでいっぱいになります。

神様は、天に召された方々、残された遺族の方々を通してすばらしい証しを見せて下さっています。

ここに、昨年二月、御夫君を天国に送られた、大濠公園教会の信者の方のお葉書の一文をご紹介します。

此の方のお父様は、永い間信仰を認めず、御夫君の入信は、何十年間の此の方の祈りの中心課題でした。

しかし、三年前御病氣になられ、段々と主に近づかれ、とうとうはつきりと主を受け入れ、最後には、病の床の枕元に

家庭集会を持つていただくまでに変えられなされたそうです。

昨年三月、栄光の中に、御召天になられました。そのお葉書は、年賀のお断りのものでした。その末尾に、

『父は、二月二十日に受洗させていただきました。今、悲しみより、淋しさより、父が御国に主とともに在ることの感謝の日々です。』

“死”から希望が生まれる。神の不思議な御業に、畏れつつ従ってまいります。』

ここで、何も申し上げる言葉はございません。
“アーメン、ハレルヤ”の一言があるのみです。



三回目のOB会

久保田 宮子

連絡には大変な事もありましたが、晴天に恵まれ心地よい五月に、若松の蟹住にあるペットエンゼル北九州の中の「遊苑」という場所で（この場所は、カラオケを教えている主人の生徒さんのところですが）、昔話に花が咲き、あつと言う間に時が過ぎました。東京方面からも参加して下さり嬉しくてたまりません。また二年後を約束して別れました。これも神のみ知ることと思います。

何より、発起人であり長老の柴田さん（九十二歳）のお元気には、驚くばかり、未だに杖いらず、眼鏡いらずです。

そのうえ、何時ものように多額の寸志と百歳漬をいただき本当に感謝でした。あまり美味しいので、近くに住む三人の子供たちにもあやかしてもらいたく、配りました。

今回お世話をさせていただき思ったことは、年を重ねたせいか、「先生」と名のつく方の多いこと、例をあげると、お茶、お花は勿論のこと、和裁、陶芸作家、社長、まだまだ書けばきりがなくらいです。

私は情けなく、何の取り柄もありませんが、神様が憐れんで下さって、クリスチャンとして神に従うことだけは誰にも負けません。

万物は神から出で、神によって成り、神に帰するとあります。また、今回はお金が残って困り、長老に相談の結果、持ち越しとなった次第です。

色々となりましたが、ある一人の方が、OB会をしてから良い事ばかり起こると言って、会うたびに若返って行くのが、一番嬉しく思いました。

この会を思い立ってから、既に二人の方が去りましたが、この先、死だけは神のみぞ知るで、誰にもわかりません。それゆえ、日々を有意義に悔いなく過ごし、神様と人から愛されて進まねばと思います。

私達は、人様に自慢のできることは何一つありませんが、三人の子供が近くに住み、月一度は全員集合して、食べて語り、孫も成長して楽しい思いをさせてくれます。

私は素晴らしい夫に恵まれ、三人の子と孫に囲まれ、結婚して今まで実家に帰りたいと思つた事は一度もありません。

最近、膝を悪くして老いを感じますが、何年生かされるか神のみぞ知るでわかりませんが、子孫に迷惑をかけないよう、二人で楽しく生きたいと心から願っています。

これから迎える高齢化社会も、牧師先生のお話をお聞きしていますと、どんな困難な問題が起きても恐れを感じません。神の前に立つその日、よく信仰を守り通したと、お褒めの言葉がいただけるよう、頑張つて行く覚悟です。

永遠の課題（善は三年の費）

緒方 とみ子

教会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

早いもので、我が家の孫（緒方朋代は、九月三日生まれです）の誕生会が、昨年ありました。可愛らしい靴をはいて、柔らかいお餅の上を踏むのですから、子供にとつてはありがたい知れない物の上、当然泣き出すのではないかと思っていましたら、案の定泣き出してしまいました。踏んだ後に色々なものを取るのだそうですが、何と現金を握りました。ひ婆さんは嬉しそうに「この子は大金持ちになる」と言つて、しっかりと孫の子供抱いた所を、婆さんである私がカメラのシャッターを切つたのです。秋頃にはすっかりと主人の病氣も治まり、再就職を考えるようになりましたが、一時は本当にわかりませんでした。神様が癒して下さつたことと、皆様の篤いお祈りの賜物だと感謝いたします。

この事も昨年の二月のことですが、主人が若い頃にお世話になつたという義理の兄は、惜しくも五十六歳の若さで亡くなりました。主人の話では「兄さんは、お酒を人の二〜三倍は飲んでいた」。私も始めて会つた時の事を思い出して、あの頃は体重が百kgを越えていたのでは…と思うほど大きな人でした。まさか義兄が倒れて病氣で亡くなるとは、誰一人思

つていませんので驚きましたが、やはり原因を調べてみると、日頃の生活の節制だと思いましたが、人の事は言われませんが、我が家も事の始まりはそうでした。

誰にも負けたくはないという主人は、仕事もそれはよくしましたが、それによつて、神様の言われる事に耳も貸しませんでした、よく倒されたわけです。兄が亡くなる前後に私達は、「あと二年すればホームローンも無くなり、退職金で借金を返して、老後は…」と自分達が計画したとおりに行くつもりでしたが、兄が亡くなつてしまつた会社を手助けしたいと言い出した主人の願いどおりに、私も賛成したのが間違ひでした。折つて主の導きを聞くべきでした。日頃からそんな訓練をしていませんから、自分の思いで進んではゴツンとやられます。身内の会社ですから少しは……ところが、前社長亡き後の社長は自分の実姉で、専務は甥ですから、それは厳しいものでした。家で行われる法事も、社員と身内が重なつているため、一週間ごとにお参りさせられました。おまけに、身なりや髪型にひどくこだわつたのは専務の甥でした。社内で行われるのは仕方がありませんが、お参りに行つた日まで言われます。それも、フサフサある髪なら答えることもできますが、私もおかしくなつて「外よりも中身よ」、と冗談を言いましたが、全くダメでした。姉がその中に入つて、うまく執り成せば良かったでしょうが、甥の言いなりで、反対

に私も意見されました。仕事は、工場の品物をトラックで運んだり、工場内での仕事ですから簡単でしたが、朝早くから夕方遅くまで働かされました。お金をやるので良いだろうという事でしたし、主人は姉からもお金を借りていましたので文句が言えなかつたのです。そして、社員達は気楽に主人の事を「おじさん」言っていたのに対して、社長と甥は、呼び名にもこだわりました。新しく出直すために、十八年間勤務した福山通運を辞めて大至（ダイシ）産業に勤めたのも、わずか三ヶ月足らずでした。それも、品物が重いので肩を壊して休んでいた日に、首になっていました。理由は、「これ以上いると姉弟仲が壊れるので」、と言う事でしたが、頭に来た主人の怒りは、言葉では言い表せないものでした。あの当分のことを考えてみると、姉にもおかしな事があつたようです。苦勞してやつと大きくなつた金属板建築材製造所ですし、働き盛りの主人を亡くしているのですから……。しかし私達も考えにゆとりがありませんでした。中に入ってくれた主人の兄も、どうした訳か仲違いになつてしまい泥沼でした。

精神的におかしくなつたのは、主人だけではありませんでした。もうこれ以上悪い事は起こらないと思つていましたら、期待していた愛犬（起龍丸号の急死）にも裏切られました。本当に身で持つて教えられました。自分達の計画ではなく、神様の計画もあつたのです。七ヶ月間の休みは我が家にとつ

て随分と痛いものでしたが、その痛みを忘れないように時々主人に言います。そして、今与えられている仕事（主人は寿タクシーの運転手。私は森光産業の縫製）に感謝して、今まで神様を裏切つてきた事をお詫びしたいと思います。

「ごめんなさい」。

そんな訳で、月のうちに一回しか行かない教会にも遠ざかる、という悲劇も起こっていますが、決して戸畑教会も神様も忘れた訳ではありません。皆様、お祈りよろしくお願いいたします。

『あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまつているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。』

（ヨハネ一五・七）



故佐藤雄二兄追悼文集に対する感謝

伊規須 太郎

(雄二兄のご母堂、シゲ様への礼状)

頌主 お便り有り難うございました。立派な追悼文集を有り難うございました。

早速一読させていただきましたが、私は今何から書いてよいかわからないほど感激しています。まず、すばらしいご本。そして巻頭のお写真。多くの皆さんが文中に書かれています。あの両親のふくらみ、もう四十年近くも昔になりますが、日曜学校時代の面影がはつきりとよみがえって参りました。

厳しい環境の中で、しっかりと自立され、早くから立派な夢(目標)を持たれていたとのこと、当時は知るよしもありませんでした。が、一時期、共に主の前にぬかずいた事が彼の人生の力になった事を思うとき、私のような者が尊い御用の一端に加えていただいた光栄を思わずにはおられません。まことに感謝です。

その後、あれほどのご発展とお働きをなさった事ははじめて知りました。彼がいかに神様の祝福のもとにあったかを感じます。

さて、私は本をよごす主義で、せっかくのご本を赤線や書き込みで一杯にしてしまいました。扉の裏は真っ赤です。一部分をそのままご紹介しましょう。数字は文集のページです。

三三……唯一のアドバイス、「匿名」

五九……誠兄と共に熱心な九大YMメンバー

六七(一二九)……里子体験の苦しみは無駄ではなかった

七一……お母さんの戦いに涙する

八三……地域での痴呆症啓蒙活動に全力

八三……サイマルの本、早速ファックス注文

一〇三(二六一)……ペシャワール会の詳細を知る

一〇三……自分が人のために何が出来るか

一〇三／一〇四……老人応援の基本、三カ条

一一五……心に残る夜間フライト

一二八……一定の生活水準を確保した時代のつらさ

一三二……葬儀に四〇五番を歌われた神様の摂理

皆様の追悼文から新しい事実を知って、改めて思い巡らせば限りがありません。しかし、私が最後に思った聖句は次のとおりです。

『彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で

神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう。』

(黙示録七・一四〜一五)

雄二さんはその苦しみを通して、ご家族を天国に結ぶ御用をなさったのではないでしょうか。皆々様の上に主からのお慰めと、終りの日の栄光をお祈りしております。

一九九六年五月二十日

伊規須 太郎

佐藤シゲ 様

(追伸)最近の高齢化社会の激流を見ますと、雄二さんの目指された所が正しかった事が実証されています。私は、例のサイマルの本を読み、この本を通して基本的スタンスを示された雄二さんと対話したいと思っています。本が届くのが楽しみです。

(注)「ぼけが起こつたら」 メイス、ラビンズ、中野訳
出版社・サイマル出版会。¥二七〇〇

以上

「夢」

上野 米子

湯水と炎暑の夏、暑い夏でした。

真夏の太陽が体に沁みこむような暑い朝でした。朝六時、今日は我が家の芋掘りの日でした。広い芋畑を芋の葉がさわさわと風に泳いでいます。家族五人、首に手拭いを巻き、野良着姿も甲斐甲斐しく、身支度をして畑に出ました。

出番の前の一服の休憩の時でした。嫁の実家の両親、妹夫妻も応援にかけつけてくれました。誰にもお知らせしていないのに有り難きことと、我が心はずみました。

その時、やや遠くに、一列横隊の六、七人の方がこちらに進んで来られる姿を見ました。どなたの方かしらと手をかざして望み見ました。よく見ると、藤掛さんの御一家でした。

そしてその前を真綿で包んだような、ふわふわした清らかな純白の玉が先にたちてこちらに向いてきます。ところが、藤掛さんは急に後向きになり、引き返すような御様子です。で、私は走って行き、折角のお出でですから、暑さのことなど念頭になく、お引き止めしました。多分、手が揃っているからと思われたのでしょうか。

この頃は体験学習という言葉が用いられております。今日は芋掘りをして、農家の方々の労働がいかに大変であるかを

学ぶためでした。

真つ赤に太った金時芋が、用意された籠いっぱい溢れま
した。

昼食は、梅干しの入ったのりむすび、取りたてのトマト、
冷えた麦茶、ゆで卵、実のつまつたゆでとうもろこし、今掘
ったばかりの金時のふかし芋。大きく広げた筵の上に自由に
座し、ワイワイ、ガヤガヤ、好きなお話をして、芋掘りによ
る、しばらくの田園の大饗宴となりました。どの一つ一つと
つても、神様の恵みでないものではありません。力と汗の、得
難い体験の賜でした。そして、藤掛さんの前にお立ちになっ
て導かれた方は、御霊の神、イエス様の霊なる幻でありまし
た。御霊はきよらかな玉となって、イエス様御自身を現し、
私の目にはつきり映し出してくださいました。これは、夢の
中での、尊い尊い主との出会いでした。

ペテロは声をあげて人々に語り掛けたと申されておりま
す。

『神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべ
ての人に注ごう。そして、あなたがたのむすこ娘は預言
をし、若者たちは幻を見、老人たちは夢をみるであろう』
私はこの聖言を示され、御霊の神が、我がうちに宿られて
いることを信じます。

『あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに

宿っていることを知らないのか。(コリント三・一六)』
と仰せになっております。

自分の人生は神によって創られたものです。いつも御聖霊
の御旨に従って御聖別にあずかりますよう、お祈り申し上げ
ております。

『あなたがたは、主にあつていつも喜びなさい。繰り返し
て言うが、喜びなさい。』 (ピリピ四・四)

私は、夢の中にまで主がお臨み下さいましたことを、心か
ら感謝申し上げます。

或る暑い夏の日 (平成六年七月十二日)

「その日その日」より



永遠の命

高木 ツル工

平成七年二月五日、主人が天に召されて、もう二年近くになろうとしています。

モーセが、「あなたの目の前には千年も過ぎ去ればきのうの如く、夜の間のひと時のようです」と祈っていますが、本当にまたたく間に過ぎ去った気がいたします。

『神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。』

(ヨハネ三・一六)

これは、主人の生涯のみことばですが、昭和二十六年十月、榎本先生のお導きをいただき、まことの神様を知り、救いにあずかって以来、信ずる者と共に歩いて下さるイエス様の御手にすがらるなら、どんな中にあつても、永遠の命の道を歩かせて下さると、感謝と喜びの尽きない信仰の生涯でした。

昭和六十三年五月十日、主人の左頸部のリンパ腺が腫れ、痛みのため産業医大耳鼻科で診察を受けましたところ、しばらく様子を見ないとほつきりした診断はできないので、当分の間通院するようにと言われました。

その夜主人と、神様に憐れみと癒しを求めて、心を注いで

祈りました。主人は、

「万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように(ローマー一・三六)。すべての事は、神からでて、神様のご支配のうちにあります。私の一切を御手にお委ねいたしますので、これによって神様のご栄光があらわれますように」、と祈りました。

『何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもつて祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではどうもい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあつて守るであらう』

(ピリピ四・六―七)

私は、大きな不安に押しつぶされた思いで、「神様、今私は、主人の病氣のことで心が騒いでおります。私の願いと心の中をご存知のあなたが、イエス様を仰ぎ望む信仰を与え、神の平安をもつてつつんで下さい」、と祈ったのが昨日のことのように思い出されます。

その後、悪性リンパ腫の疑いがあるとのことで、中間市立病院に検査入院することになりました。早速、頸部リンパ生検、皮膚生検などの検査を受けました。入院中は薬の副作用のため、全身のかゆみで眠られない日もありましたが、万事を益と為して下さる神様を信じ、検査入院を終えて退院しま

した。

検査結果は産業医大でということ、翌日、私も一緒に行く予定でしたが、主人が「一人でよいから」、と言って出かけました。そこで、主治医から「検査の結果は悪性のリンパ腫に間違いないので、早速今日から治療を始めましょう」、と言われました。

その時の主治医との会話は、残された主人の日記によりますと、次のように書いてあります。

主治医「あなたの病気は悪性リンパ腫ですから、早速今日から治療を始めましょう。」

主人「先生、悪性リンパ腫とはガンのことですか。私はクリスチャンですから、何を聞いても驚きませんが、病気のごとは家族にも詳しく話さなければなりませんので、すべて隠さずはつきり教えて下さい。」

主治医「何も隠してはいませんよ。だから一日でも早いほうがよいので、今日から抗がん剤の点滴を始めましょう。」

主人「先生、待つて下さい。私は、病気の事も、治療についても、まず牧師先生にお話しし、お祈りしていただいた上で、どうするか決めたいので、今日は受けられません。しかし、もし治療しなかつたらどのく

らいの命と先生はお考えですか。」

主治医「それは私にもわかりません。学問的には一年位と思われます。あなたの良いようにして下さい。」

次の日、牧師館に榎本先生をお訪ねし、病気について詳細にお話しし、お祈りしていただき、お導きをいただき抗がん剤の治療を受ける事になりました。

こうして、第一回の抗がん剤の点滴が始まりました。その後、主治医より私共家族の者にも、「ご主人の命は、長くてあと一年位と思っていて下さい」と、宣告を受けていまして、が、神様の憐れみとお恵みによって、実に約七年間も生きられました。

「あなたがたの命は、キリストと共に神のうちに隠されているのである」と、聖書のお言葉をしみじみ味わい乍ら、生かされている喜びを感謝しておりました。状態の悪い中にもかかわらず、常に主の十字架を仰いで平安そのものの毎日でした。かえって、私の方が不信仰に陥ることがありました。

主人の病気は、手術によってガン細胞を切除するのではなく、薬物療法によって病状を抑えるようなものだからという思いが心のうちに燻って、主人のように全面的に神様のみ手にお委ねできない時期がありました。そんな時、榎本先生によつて、ヨハネ一章の、ラザロの死に対し、イエス様の言

われた「石を取りのけなさい」のお言葉が与えられ、「もし信じるなら神の栄光を見るであろうと、あなたに言ったではないか」と、やさしく語りかけて下さるご聖霊の声を聞く事ができました。その時、心のうちに重くのしかかっていた不信仰の大きな石をイエス様によって取り払っていただき、主人と共に、ローマ一・三六の聖言をアーメンと受け入れさせていただきました。

永遠の命とは、唯一のまことの神でいますあなたと、またあなたがつかわれたイエス・キリストとを知る事であります。(ヨハネ一七・三)

鈍くて愚かな私も、聖書をとおし、また、ご集会に近づけていただいて、神様の一方的なご愛と、イエス様が私にどんな事をして下さったかを、ご聖霊によって悟らせていただく時、いつも信仰の原点に立ち返っては、永遠の命の道を歩く事のできる幸いを心から感謝しています。

主人は、私や家族の者に、神様のご愛を信じ信頼する者に永遠の命を与えて下さる確かな証しを残し、主のみもとに喜び勇んで凱旋いたしました。

榎本先生ご夫妻をはじめ、皆様の常日頃からなるとりなしのお祈りを、心から感謝申し上げます。

平成九年一月

我が思い出(六)

旧満州(現中国)編

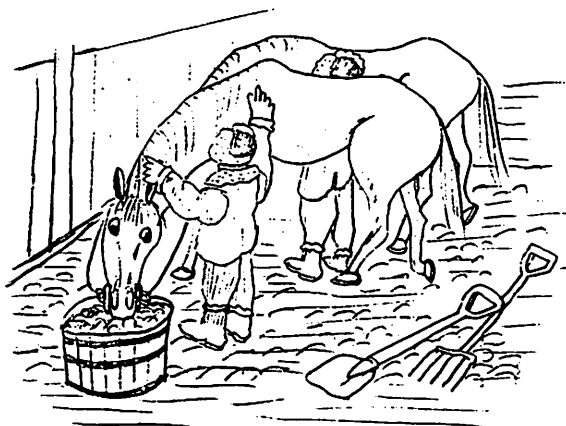
鈴木一幹

一 馬は兵器だ

午後の訓練を終え、馬舎に夕方の水飼飼付に行き、各自の担当馬に水を飲ませ、馬糧を与えて帰る途中、戦友の川上君が困った顔をして「おれの久緑(ひさみどり)が水をあまり飲まなかったが大丈夫だろうか」とのこと。(久緑とは馬の名で、初年兵に一人一頭づつ、訓練のため持ち馬として預けられていた。)

「しかし、馬糧を与えたら食べていたので幾分安心したが」と言った。私は、「おい川上君、水は何回飲んだのか」と尋ねると、「五、六回位しか飲まなかったが」とのことでした。

私は「それはまずいなあ、それじゃ飲んでないのも同じだ。それに馬糧を与えては良くないではなかったか



なあ」と思ったが、何か気持ちが落ち着かないまま、班に帰着しました。

消灯ラッパで就寝しましたが、川上君も寝返りを打ち、私もしばらくして不審番から、隣に寝ている川上君が起こされているのに気づきました。不審番の話では、馬舎からの連絡で、久緑が疝痛を起こして倒れたので直ちに馬舎に來いとの伝言であった。やはり胸騒ぎがしていたのが本当になったか

と思ひ、私も飛び起き、川上君に同行することにしました。二人は急いで防寒服に着替え、馬舎を目指して急いだ。川上君は「鈴木君すまんなあ」と、しきりに繰り返して、「なに戦友だ、お互い様だ、心配するなよ」と、慰めながら走った。夜十時を過ぎて、外は零下十度は下っているだろう。幸い雪は止み、積雪は十センチ位、暗夜であるが周囲はほの白く視界は良かった。兵舎から馬舎までは約五百メートルはあり、道路は凍りついてゴム底の防寒靴でもよく滑り、道路端の外灯をたよりに、足に気を配りながら急いだ。

馬舎に着いて久緑の馬房に行くと、いつもは立っているはずの馬が倒れ、体を横にしているではないか。

数人の馬舎当番古兵殿達が久緑のそばに集まって、内一人が藁束綱で腹をさすっているではありませんか。我々二人の到着を見つけた馬舎廻番上等兵殿が、「川上二等兵、貴様は

夕方の水飼では久緑は何回水を飲んだのか」と尋ねました。川上君は、「はい、五、六回しか飲まなかったと思います。」と答えました。廻番上等兵殿は「それでは、この水飼記録簿の久緑の欄には三十五回と記録されているのは、嘘の申告をしとったのか」と大声で叱り付けました。さらに、「水を飲んだ回数が少ない馬には、後で再度飲ませ、二十回以上飲むまで馬糧は与えてはならぬことになっている。貴様も習って知つとるだろうが。嘘の回数を報告するとは何事か。もし疝痛で馬を死なせたらどうする」。 「気を付け」、と号令を掛け、「馬は恐れ多くも天皇陛下からお預かりしている我が砲兵隊の兵器である。もし死なせたら、貴様は陛下に對しどのようにお詫びするつもりだ。貴様らは一錢五厘の召集令状でいくらでも集められるが、馬はなかなか補充してもらえないのだ」と言いながら、横の柱に立て掛けてあった馬糞すくいのスコップで川上君の尻を叩きました。川上君は倒れながら真つ青な顔をして「申し訳ありません」と、尻を押さえながら詫言いました。

廻番上等兵殿は、「貴様を殴つていても時間がもつたいない。古兵に代わつて束綱で馬の腹をこすれ」と命じました。

以後、川上君と私が古兵殿達に代わつて交互に腹をこすりました。時々古兵殿が馬の下腹に耳を押し当てて内臓の動音を聞いていましたが、「まだ音がしとらん。もつと強く力を

入れてこすれ」と命ぜられました。二人は手に力を入れてこすり、そのため寒いにもかかわらず体中に汗が流れました。

夜十二時を過ぎた頃、週番上等兵殿が再度来られ、「まだ経過は好転しないか」と尋ねられました。古兵殿が「はい、懸命にやっておりますが変わりありません。」と報告しました。週番上等兵殿は「そうか。朝になつてもガスや馬糞が出ない時は、連隊本部の獣医殿に来てもらうしかないが、その前に我々のできる最後の努力をする。お前達は、今から己のすることをよく見ておけ」と言つて、桶に汲んできた湯に石鹼を溶かし、上衣を脱ぎ、右腕をまくりあげ湯の中につけ、その腕に石鹼を塗り付け、「皆、後足を押さえとけ」と命じました。古兵殿や私共二人も、足を懸命に押さえました。週番上等兵殿は、石鹼の付いた手を固く握り、そのまま馬の肛門に差し込みました。そして腹部に溜まっている馬糞を掻き出し始めました。腕が引き出される度に少量の馬糞らしきものが付着して出てきました。何回か繰り返された後、「おい川上二等兵、今見た通りにやってみろ」と命じました。川上君の顔は青白く、今にも倒れそうな様子でした。とっさに私は「はい、鈴木にやらせて下さい。」と言つて、上衣を脱ぎ右腕をまくりあげ、習つたとおり腕を湯につけ、石鹼を塗り馬の肛門に差し入れようとしたが、力が足らぬのか、上等兵殿のように上手には行きません。と、横で見っていた週番

上等兵殿が、「馬の肛門は時々息をするので、その時に合わせて入れてみる」と言われました。私は言われた通り、少し間を置いて差し入れました。今度はうまく入りました。

生暖かい袋の中に手を入れたようで、時々腕全体を締め付ける様な、時には腕がつぶされそうな力が加わることがわかりました。指先で袋の周囲をさぐり、丁度、阿寒湖の蘘藻の様な異物が指に触り、これが馬糞の一部だと思ひました。

これらの異物を集めて握り一気に引き出しました。確かに馬糞でした。今度は更に奥に入れて再び掻き出そうと一気に差し入れました。右腕の肩の付け根まで入りました。今度はかなりの馬糞の固まりがありました。そして握つては腕を引き出し、外に掻き出し、数回繰り返しました。

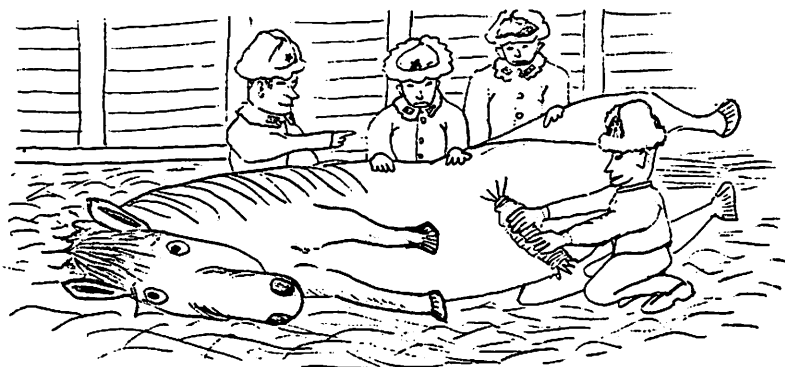
川上君は古兵殿と一緒に腹を束綱でこすっていました。

私はこの時、懸命に祈りました。「天の神様、どうかこの馬にもう一度元気をお与え下さい。戦友の川上君にも貴方の恵みをお与え下さい。主イエスキリストの御名により御前に捧げます」と何度も祈りました。すると今まで腹をこすっていた川上君が、「今度は川上がやってみます。代わつて下さい。」と言つて、私と交代しました。私は今度は束綱を持つて腹をこすりました。古兵殿達足を持ち、時々腹に耳を押し当てて腹の動音を聞いていました。朝方四時頃、再び川上君と交代し、腕を入れて掻き出す動作をしていた時、突然、

ガスと馬糞が一緒になって、私の腕を肛門の外に押し出しま

した。さらに多量の馬糞が噴出しました。そして今まで横になっていた久緑が急に立ち上がりました。

これを見た五、六人の古兵殿達が一斉に集まって万歳を叫びました。週番上等兵殿も駆け付けて来られ、立っている久緑を見るなり、「良かったなあ」と繰り返し、皆一団となって万歳を叫びました。皆は良かったなあ」と肩を抱き合い、馬の顔を撫でました。川上君の眼には喜びと安堵の大きき涙が流れていました。



二 砲手訓練

朝の点呼後、週番士官の大神少尉殿から中隊長殿の命令の伝達があり、今日から各兵科に分かれての訓練が行われることになった。第四中隊の初年兵五十名中、砲手班は二十名、担当教官は第四班の班長の佐藤伍長殿で、補佐教官として二名の下士官（何れも伍長）が担当することとした。

第四中隊の砲廠に到着すると、砲廠横広場に既に古兵殿数名が待機しており、建物から砲を引き出す用意をしておいた。佐藤班長殿が初年兵の一人に、「おい中野二等兵、お前は娑婆にいたときは、東京相撲の力士であったそうだな。今から古兵に教えてもらって、一人で砲一門を引き出してみろ」と命じました。中野二等兵は一般の兵より背丈も高く、見るからに力士の体形をしていました。一同見守る中を、古兵殿の指示を受けながら砲の架尾部分を右手肘部で持ち、「えい」と掛け声を掛け持ち上げました。更に力強く、後向きのまま、少しづつ広場の方まで引っ張って来ました。（砲の重量は約二トン、砲身の長さ二・三メートル、口径は七・五センチメートル、最大射程は約十一キロメートル）

これを見ていた皆も驚くと同時に、佐藤班長殿は「見事だ、良くやった。貴様は実戦には我が砲手班には欠かせない存在だなあ」と言って拍手し、皆も一斉に拍手しました。

あと二門は、一門に十名づつに分かれ、二人が架尾を持ち

上げ、他の八人で車輪や砲身を押し、やっと広場まで運び、ようやく三門が一行に並びました。

七名二組、六名一組の三組となり、三門の大砲での操作訓練が始まりました。古兵殿達は模擬弾四発の入った箱をそれぞれ一門に一箱づつ砲の後方に用意していました。

私は川上君と一緒に六名の佐藤班長殿の指揮下に割り当てられました。他の下士官二人も、それぞれ七名づつの指揮を取っていました。佐藤班長殿は、六名に対しそれぞれ一番砲手、三番砲手、四番、五番を割り当て、一番砲手には川上君、三番砲手には私が指名されました。一番砲手の任務は砲の閉鎖器（弾を込める砲口の閉閉をする器）の操作と竜条（引き金）を引くこと。三番砲手は後に位置する四番砲手が用意した弾をもらい、砲に弾を込める操作で、四番以下は後方で弾を用意して三番に渡す役でした。

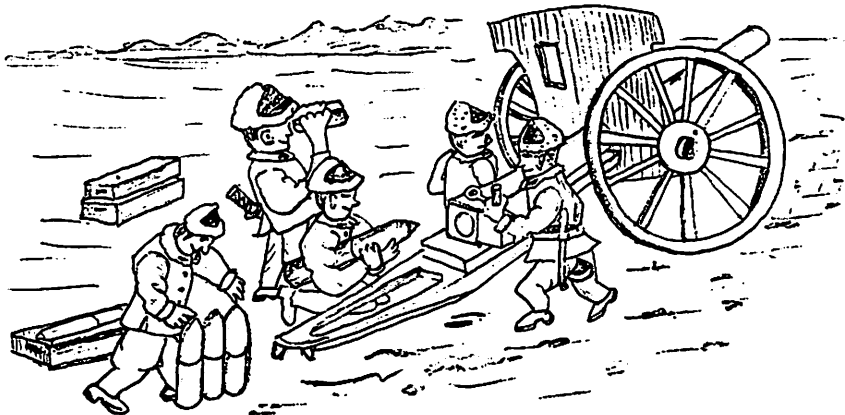
各砲毎に教官殿は初年兵に操作を教え、いよいよ「打ち方始め」の号令がかかりました。教官殿達は、標的用の赤白塗りの鉄のポールを持つて立っています。操作は、先ず一番砲手が閉鎖器のハンドルを右手で握り手前に引くと閉鎖器が開き、砲身の口が開き、次に三番砲手が四番砲手から渡された弾を受け取り、右手で砲口に押し込む。すると一番砲手が閉鎖器のハンドルを前方にもどし閉鎖器が閉まって弾は完全に込まった状態になる。そこで一番砲手は「よし」と合図する。

次に教官殿の「撃て」の声で、一番砲手は右手で竜条を一気に砲身に沿って後方に引くと、「カチン」と撃心を打つ音がする。（実弾が入ってれば発射音がするところですが。）

次に教官殿の「よし」の声で、再び一番砲手が閉鎖器のハンドルをれ前に引いて砲口を開けると、今度は薬莢が後方に飛び出る仕組みとなっていました。

教官殿の「撃ち方始め、撃て、よし」の号令に従い訓練が続きました。各自が馴れていないため、操作を誤る度にポールで頭を殴られました。弾の重量は一発約十五キロで、一箱の弾箱に四発入っているのです、一箱では六十キロはありました。

三番の私は後に居る四番砲手から左脇で弾を受け取り、右



手に持ち替え、砲口に弾を込めるのですが、連続十回もすると腕の力が尽きて、そのうちとうとう弾を取り落とししました。

それを見ていた佐藤教官殿は、「よし、一巡繰り上げ交代せよ」と命ぜられました。私はホッとして、一番の川上君と交代しました。

一番砲手は、操作は他の砲手より手間がかかるようですが、腰掛けがあり、三番のように力はそれほど要りませんでした。

川上君はかなり頭を叩かれた様子で、頭をさすりながら六番に下がって行きました。

午前の訓練を終え、砲廠内に砲を運び込み、帰班のため砲廠前に整列しました。出発にあたり、今回の訓練の結果について次のように言われました。

「今日は砲の操作は初めてであるから仕方ないが、今日の様な操作振りでは実戦には全く役に立たぬ。これから毎日徹底的に訓練を行い、各自何番になっても操作ができるように、また夜間暗闇でも、また眼を閉じていても楽に操作が行えるようになってほしい。あと数ヶ月後には、初年兵の一期の検閲がある。(検閲とは、各隊の初年兵の訓練振りを師団長閣下が直接見聞することで、その成長により各隊の優劣が判定されるものとされていた。)それまでに早く操作が身につくように。」と言われました。

午後の天候は午前中とはうってかわり、激しい北風と共に

吹雪となったため、野外での訓練を変更し、砲廠内での訓練となりました。今度は全員が二番砲手が行う回転盤の操作訓練を受けました。回転盤が五台、一台に四名づつ配置されました。この機械は二番砲手が操作するもので、砲撃後の着弾点の修正、戦車等移動する目標の照準修正をするもので、この操作で目標に弾を正確に当てるためのもので、二番砲手の最も重要な操作の一つのことでした。

各班長殿と古兵殿の号令で、一度に五名が同時に操作しました。回転盤には小さな目盛が刻まれていて、横に付いているハンドルを右手で掴み、右に回す時は上向きにハンドルを回し、左に回す時はハンドルを下に回せば、それにより目盛の付いた回転盤が右又は左に回るようになっていました。私は四名中三番目でしたので、一番目の操作するのを見ていました。班長殿の号令が掛かりました。椅子にかけながら号令に合わせてハンドルを回していました。「三つ右、四つ左、六つ右、二つ右、五つ左。よし、今幾つになっているか。」と言われました。



五台の回転盤の椅子にかけている兵がそれぞれ答えました。「二です」、「五です」、「三です」、「二です」、「四です」。すると班長殿は「今の正解は二である。二でなかった三名は後ろに置いてある弾箱を担いで砲廠を一回りしてこい」、と命ぜられました。数字が正確に合う兵は五名中一名か二名で、ほとんどが違いました。砲廠一周で約百五十メートルあり、間違う度に何度も行かなくてはならず、一箱六十キログラムはある弾四発入りの弾箱がずしりと肩に食い込み、吹雪の中では眼に雪が付着しても片手を使って眼をこすすることもままならず、担ぐ手も冷え、次第に感覚もなくなり、今にも肩から落としてしまうのでした。

三 風との戦い

初年兵の毎日は、起床から就寝まで自分の自由時間はほとんど無く、古兵殿の下着や衣類を洗濯しても、自分の衣類までこまめに洗濯する余裕はありませんでした。毎日の訓練で汗や埃、馬糞にまみれ、甚だしく不潔になっていました。

特に、寒くなつて毛物を着ると風が大発生し、体中が痒くなっていました。最近では特にひどくなつて、私達皮膚の弱い者は、全身発疹が出ていました。

この虱取りが、初年兵の僅かな休憩時間の日課になっていました。

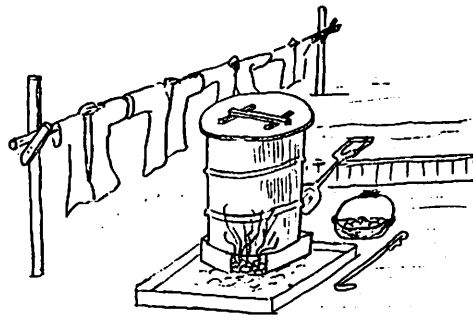
幸い今日は日曜日で、ほとんどの古兵達は朝食後は外出し、残っているのは初年兵と数人の古兵殿だけでした。

二階の寝台から下の様子を見ていた陣内上等兵殿が、「おい初年兵、お前等皆下着を脱いで裏側の縫い目を調べてみる」、と言われま

した。皆が一斉に脱ぎ始めたので、私も早速脱いで裏返し、縫い目を調べました。

縫い目の間には、白い鳥賊の形の小さな虱が、ぎっしり並んでいるではありませんか。

せんか。指の爪でつぶすと、パチパチと音を立ててつぶれませんが、下着の上下は勿論、ふんどしまで発生しているので手の施しようもなく、困っている、陣内上等兵殿は「よし、仕方がない。皆下着を全部着替える。着替えが済んだら脱いだ下着を持っておれについて来い」と言つて、洗面所一番奥に設置してあるドラム缶を示し、「この中に各自の下着を入れる。今から石川五右衛門の釜茹でや。今から二時間煮沸させ、その後引き上げて洗濯しろ」と言つて、ドラム缶が置



かれた焚き口に石炭を入れ、点火させました。しばらくすると、ドラム缶はぐつぐつと煮え立ちました。二時間位して引き上げ、早速広げて点検してみると、縫い目に並んでいた風が茶色になって見事に全滅していました。今思ってもゾツとするほどでした。

初年兵は日曜日でも外出許可は出ませんので、この風掃討作戦は毎日曜日の日課となりました。

(以下次号)

御霊に満たされて

小松南子

生まれつきひ弱だった私が、主の救いにあずかってから今日まで健康に過ごさせて頂きましたが、此の度、鼓室真珠腫中耳炎という耳の病気で二度の手術を体験させて頂き、その中であって主の深い御愛と恵みを頂き、心から感謝致しております。主の恵みを心に留めこれを記念すべきと、主の御霊

のお導きにより、拙い文ではありますが、少しでも主を喜ぶことができればとペンを取りました。

昨年(平成七年)五月、耳の異常を感じ病院に行きましたところ、真珠腫中耳炎で、治すには手術しかありませんとのこと。思いもかけない事でした。

耳鼻科には何度かお世話になった事はありましたが、まさか手術をしないとけない様な病を持っていたなど、夢にも思わないことでした。病气など、まして手術など経験のない者には、今の進歩した医学の知識もなく、全身麻酔と聞くだけで死と繋がり、いまさら手術などしなくてもと、色々迷いがありました。しかし自分の思いではなく、主のお導きをお願い、お祈り致しておりましたら、『万物は、神からいで、神によつて成り、神に帰するのである』、と聖言を頂き、手術の決心を致しました。それからは何の不安もなく、生きるも死ぬも主の手の内にある事を信じ、すべてを主に委ねて、七月十一日に平安のうちに手術をして頂きました。手術室に入ります時も、主が共にいて下さり、何の恐れもなく、また先生はじめ皆様の顔が、祈りが感じられ、感謝でございました。集中治療室で麻酔が覚めました時、主の憐れみで生かされていくという喜びを実感として味わわせて頂き、ただただ感謝でございました。

皆様方の祈りで手術後の回復も早く、感謝のうちに一ヶ月

間の入院生活を過ごさせて頂きました。その中で教えられ
ましたことは、入院生活も日が経つにつれ、病との戦い、不安、
淋しさ、家族への思い、束縛された生活など、入院生活をさ
れた方が味わう色々な思いを経験させて頂きました。

しかし私達はそんな中にあつても、信仰によつて、主の慰
めと力と望みを頂くことができますが、神様を知らない方は
どんなに辛い入院生活だろうかと、心痛む思いでございまし
た。

『ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父な
る神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神は、いか
なる患難の中にいる時でもわたしたちを慰めて下さり、
また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰め
をもつて、あらゆる患難の中にある人々を慰めることが
できるようにして下さいさるのである。』

(Ⅱコリント一・三〜四)

平成八年五月、手術の後遺症がやつと取れたかなあとと思う
とき、もう一度手術を考えて下さいとの先生のお話し。主の
み旨を教えて下さいと祈りました。先生にも祈って頂きまし
た。そして木曜会するとき、『心をつくして主に信頼せよ、自
分の知識にたよつてはならない。すべての道で主を認めよ、
そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。』と聖言
を与えて頂き、九月四日に手術をして頂く様に、病院の手術

きを致しました。

入院が近づくにつれ、二度も同じ病気で同じ体験をさせ
て頂くなら、今度は前と違った入院生活をと願つておりまし
たところ、入院二日前の礼拝で『あなたがたのからだを、神
に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。』
と聖言を頂き、この身をすべて主に捧げて、病床であつても
日々礼拝をさせて頂きたいと願いながら、喜びをもつて入院
させて頂きました。

病室は以前と同じ部屋でしたが、窓際の空や木々が見える
落ち着いた場所で、外の大堀端には蓮の花が美しく咲き、
主は私の気持ちをご存知で、憐れんで、私のために良き場所
をあけて待つていて下さったようでした。一人で静まるのも、
聖書を読むのも、テープを聞くのも、人様に気遣うこともな
く、私の良き書斎となりました。

そして、願わくばもう一度生かされて、この場所で主と共
に過ごすことができる事を祈つて、手術室へ入りました。

『あなたがたが主と共にいる間は、主もあなたがたと共に
おられます。あなたがたが、もし彼を求めるならば、彼
に会うでしょう。』
(歴代志下一五・二)

『聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおう
でしよう。』
(ルカ一・三五)

手術を終え、ベッドで、この聖書の奥義を味わわせて頂き

ました。この世のすべてから解放されて聖靈に満たされ、主と交わり、主と共に過ごす二十四時間。まるで主の花嫁として頂いた様な喜び、ただ感謝でございました。主と語り、聖書を読み、テープを聞き、主と共に過ごさせて頂いており、辛く感じておりました入院生活も感謝に変えて頂きました。

『万軍の主よ、あなたのですまいはいかに麗しいことでしょう。わが魂は絶えいるばかりに主の大庭を慕い、わが心とわが身は生ける神にむかつて喜び歌います。』

(詩篇八四・一一二)

一度目の手術では、身体が主によって生かされているという実感。二度目は、主によって心が生かされ、永遠の命が与えられているという実感。

主は私の生ぬるい信仰を憐れんで下さって、六十歳を前にして、病氣を通してこれからの歩みを整え、老いて行く日のために希望を与え、力を与え、どんな時でも感謝をもって日を過ごせる様に……

これからの日々、主を慕い求め、主の御霊に満たされ、主に寄りすがって歩みたく願っております。

今度の病氣の事で、先生ご夫妻のお祈りとお導き、また皆様の篤いお祈りを心から感謝し、心からお礼を申し上げます。

『ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは

窮めがたく、その道は測りがたい。だが、主の心を知っていたか。だが、主の計画にあずかったか。また、だが、まず主に与えて、その報いを受けるであろうか。万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように、アーメン。』

(ローマ一・三三―三六)

「生かされて 朝の気配を感じつつ」

主の憐れみを 感謝する」

「ますいさめ 夫の顔を かすかに見

手をにぎりて 喜び感ず」

「手術終え 部屋に帰りし 枕元

娘が持てし カーネーション」

「ベッドにて 耳の痛みを 感じつつ

きよき咲きたる 蓮の花かな」

「おとなりの 退院喜びの声 ゆめうつつ

痛みこらえて 共に喜ぶ」

「痛みさえ 孫の手紙で はげまされ

夕日はるか 主を讃美する」

「愛されて 主と共に歩む 喜びを

あなたにあげたく 主に祈る」

「ベッドにて 一人静まり 主と共に

交わり深き 時幸なり」

「病床上で ねむれぬまま 主と語り

時間をわすれて 雨の足音」



抗議のハガキ

— K S

運輸大臣、亀井静香殿

突然お手紙を差し上げる失礼をお許し下さい。

去る（一九九七年）一月二二日付け朝日新聞紙上で「日野

市の高速道課税」に関する貴大臣のご発言が報道されました。

「アルツハイマー」という言葉をお使いになったのは間違

いないように拝見いたしました。「できぬ事をできるように

報道すること」はアルツハイマー患者にはできません。この

ご発言には差別的な響きも感じられます。

どうかアルツハイマーについて勉強なさって下さい。一番

よいのは、貴殿がアルツハイマーの介護を自分で体験され

る事で、これは私〇〇が〇〇〇の介護を通して実感したとこ

ろです。国政の衝に当たる方が迫り来る大問題の実態を熟知

されるならばわが国の幸いこれに過ぎるものはないと存じま

す。貴大臣の一層のご活躍を期待いたします。失礼いたしま

した。

一九九七年一月二三日

痴呆老人を持つ家族の会会員

〇〇〇〇

（注）この問題は新聞でだいぶ叩かれています。

カナダでの体験を通して

貞 頼子

カナダ。わたしは三年間思い続けて、やっと去年行く機会が与えられました。一生懸命働いて、いつかきつと実現する、いや必ず神様は絶好の機会に行かせてくださると信じて、仕事場でのいやな事を言われても耐えることができたのだと思います。

わたしは、モントリオールの教会で知り合ったモナという女性と約束をしました。「カナダで体験したすばらしい思い出をみんなに伝えなさい」。

彼女は少し変わり者で、最初は近寄りがたかつたけれど、とてもオープンで、親切で……。お母さんのようにわたしをかわいがってくれました。カナダのパレードに参加したり、聖歌隊に参加させてもらったり、韓国教会の青年会に参加することができたし、教会のバザーには参加する……。数え切れないほどの思い出を作ることができました。

彼女が言うには、私たちの出会いは神様のお引き合わせね。まさにそうだと思います。はじめはバンクーバーで二ヶ月住んでいました。本当にすばらしい場所で、海はきれいだし、はるかかなたにはロッキー山脈が見え、農場もはるかかなたに広がり、ブラックベリーも取り放題（野生で咲いている）、

バンクーバー島にあるピクトリアまで行く途中のあの牧歌的な風景。もう言葉では言いきれないほど魅力的な場所でした。が……。

わたしの目的は英語習得でした。確かに日本人が多いとの噂は聞いていましたが、カナダでたくさんの方達を作るといっても、日本人の友達ばかりなんて英語の勉強にはなりません。でも運のいいことに、一人のカナダ人の友人に出会いました。その人は日本に興味があるということでも仲良くなりました。でも、その友人はモントリオールの人で、帰らなければいけないのです。バンクーバーで1年半働き、大学へ戻ることでした。とにかく、その友人のお世話になるつもりはなかったけれど、なるべく日本人と接触できないところへ移動したかったです。本当に、外国に来て何しにきているのだろう、と思わされる日本人を何人も見えました。わたしは、日本人が嫌いという意味ではなく、ただ自分のためにならない、という所以で移動に踏み切ったわけです。その友人の言う通り、モントリオールではほとんど日系を見かけませんでした。学校も日本人が一人もいないという環境でした。ほとんどはフレンチ・カナディアンでした。私立の学校でしたが、先生もいい先生でよかったです。とにかく、振り返ってみると、本当に神様は良い道を備えて下さった、いや、わたしが想像している以上の業を示して下さいましたと感謝

しています。

はじめは不安だらけでした。孤独との戦いでした。言葉も的確に通じなく、しかも知り合いもない、ましてや来た事もない外国に住んでいる。そんなとき、神様を頼りたくないで生きていけましようか。「あなたが右にいますゆえわたしは動かされることはない」。わたしは本当は臆病で何一つ力はないのに、良く考えてみると大胆不敵といった感じで突っ走っていました。その根源は言うまでもなく神様の業です。

そして、わたしが想像していることよりもさらに良い状況を与えて下さった。このカナダの生活で、今後の人生に大きな目的が与えられたし、自信もついたし、何ととっても神様を信頼する姿勢が大きく変わったことは確かです。(しかし、少し厚かましくなったような気がしますが……)

少し余談ですが、わたしは今まで飛行機に乗ったことがありませんでした。上からの景色にすごく感動し、一つの英語のことわざを思い出しました。

** Every cloud has a silver lining.**

日本語のことわざにあてはめると「苦は楽の種」ですが、直訳すると、すべての雲には銀色の光(太陽の光)を持っていて。曇りの日や雨の日は、下から見ると暗くて憂鬱になりがちですが、実を言うと裏側は太陽の光を浴びているのです。

まあ、理屈で考えると当たり前なことなのですが、これを

人生にあてはめると、どんな暗い状況でも必ず光が隠されているということ、神様に背を向けていつも下ばかりを向いて今の状況に頭を抱えているかもしれないけれど、背中にはいつも神様の光を浴びている。振り返らない限りいつも心は曇りだけれど、振り返って眩しいくらいの光が当たっていることに気づいたとき、幸せを感じるのではないのでしょうか。

外国に行つて日本を外側から見ることができたし、また比較することができました。日本にもいい部分がたくさんあるし、日本人としての誇りももつと持つべきです。しかし、最近では裕福なせいか幸せの価値観が変わってきているように思うのです。人が持っているものを欲しがると、高価なものを欲しがると、全然悪い事ではないけれど、ちよつとした小さなことに感謝する姿勢が薄れてきているのではないか……、と思うのです。言い換えれば満足感の変化、それは時代とともに比例するものであるかもしれない。それは物質的なことにあてはまるのであって、精神的なものにはあてはまりがたい現状であるような気がするのです。中学生の自殺を例にとつても、それをカナダ人に説明すると、それは驚いていました。例をあげるときりがないけれど、外国に行つて一人孤独感を味わうことは精神的に養われる最高の場所ではないかと思うのです。また、西洋人の人柄に触れるのも何か得るものがあると思えます。とにかく、これから私はやりたいことが沢山

あります。しかし、結果を表すのは神様だし、一つ一つの現
状に感謝してお祈りする事が、今の私の幸せです。もつとい
ろいろと人生経験を積んで、もつと神様に従って行く姿勢を
もつことが今後の課題です。



野村末義兄記念会にて

榎本和義

野村先生がなくなられてもう五年になるということで、私
はほんとに時の流れが非常に早いなということをおぼわされて
おりますが、野村先生の告別式以来、なかなか記念会に出た
いと願いつつ、福岡の方とのスケジュールがあいませんで出
席できないでございました。今日は、はからずもこの祭日とい
うことで、私も時間をもらう事ができました、こうして皆さ
んの思い出を聞かせて頂いて、ほんとに感謝しております。

野村先生を最後に私が元気な姿でお会いしたのは、伝道会
のあとで、丁度オルガンの二つ目位の椅子に蹴躓きましてね、
大きな音を立てて転んだんですね。その時が最後だったと私
は思います。

それからご自宅で療養なさったり、その後体調を崩され入
院なさったということで、なかなか、お見舞い上がりた
と思いつながら出られなかったことを非常に残念に思うのです。
もう一度元気になられると思いつつ過ごしてしまつた事を非
常に残念に思います。おそらく、あの伝道会の時、胸を打た
れて肋骨を骨折なさつたのが、それからのきっかけとなつた
のだろうと思うのですね。その意味においても、何か残念な
思いがするわけですけど、併して、それも神様の大きなお

取りはからいの中にあつた事と思ひます。

福岡に、戦前野村先生がおられた時のことを知っておられた方がおられまして、まあその方の話を伺いますと、お姉さんに連れられて、まだ独身のその方が（今は八十一歳になつておられますが、その頃はまだ二十歳前後の方だった）、その方がよく言われるのです。野村先生は美男子だったよと言うんですね。玉子をむいたような肌白の、目鼻立ちのくつきりして、自分は教会は余り好きではなかったけれど、野村先生に会うために行ったんだと（笑い声）、それから戦争になつて自分はしばらく教会に行かなくなつてしまつたと言つておりました。

その頃、私の父と野村先生は、まことに対照的だったようでありました。榎本先生は色が黒くて気難しそうで、野村先生は丸顔で色白でほんとにやさしくて、もう若い人のあこがれであつたと……（笑い声）

さもありませんと思うのですね。野村先生が、先程、ダンディでベレー帽の似合う方、本当にいろんな意味においてモダンな方だったなと思ひます。それと、皆さんが持つていらつしやる思ひ出と同じでありますけれども、非常に優しい方です。やはり神様の恵みにあずかつて、救いにあずかつて本当に謙遜な方でいらつしやつたと思ひますね。

私も非常に印象深く思ひるのは、野村先生がいつも自分を「死んだ犬」と、あのメピポセテの記事がございませうけど、その箇所をよく引いて、ご自分のことをそのように例えていらつしやつて、そういう者を神様が憐れんで下さると言う、その恵みに絶えず生かされておられた事を思ひます。

非常に謙遜な、控えめな方だったと思ひます。ですから、私もたびたび接しておりましたんですけど、何かいぢゆる強烈な、何か大きな事件とか出来事を共にすると言うような事は殆どなかつたように思ひます。と言ひますのは、その時代に高木さんとか、伊規須さんとか、あるいは東さんとか若手の方々がおられます。それぞれ個性が非常に強いですね。印象深いんですね。ところが野村先生については、非常に静かで、あまり何と言ひますか、ご自分の存在を目立たさない、そういう方だったなと思ひますね。そして、とても優しく、私達が話し掛けていろいろな議論になつても決して言い返さない、あるいは説得しない。聞いてくれる、そして受けとめて、聖書の言葉なり、聖書に書かれてゐるご自分の教えられる事をつけ加えて下さる。議論して反論して口角泡を飛ばすと言う事はない。ところが、他にはそういう若い人が沢山いましたから、野村先生はそういう意味においては非情に静かであつた、優しい方だったと思ひます。

ところが私の記憶によりますと、その優しい方が非常に強

い面がある。何かと言いますと、戦後しばらく食糧難が続きました。私共が子供の頃、家に鶏を飼っておりまして。卵を産む間は大切にされていきますけど、産まなくなりましてこれは当然食卓にのぼるわけです。だいたい父が首をしめる時、いわゆる「殺す」わけですね、誰にたのむわけではないのですけれど、どういう訳か野村さんに声がかかるのです。そうすると、野村さんは非常に上手なのです。鶏に一声も鳴かせずに、すつと安楽死させる（笑い声）。そしてあときれいに処理を下さる。その時に血を出さずすけれど、死んだばかりの鶏の血を盃に取って、これは身体に良いのですよ、そう言つて、ぽつと口に入れなされる（笑い声）。私はそれを見ながら、到底太刀打ちはできない方と思えました。それから後は、野村先生を囲んで、鶏ですきやきが始まるわけです。到底私は食べる事はできません。食べられなかったのですね。ところが野村先生は「おいしい、おいしい」、そう言つて喜んで食べていらつしやつた事を思い出します。

それからもう一つは、やはりその時期だったのですけれど、兎を家に飼つておつたんですね。食事が乏しくなつておりましたから、それも食べようと言う事になつて、今は皆さん兎を処理する事は先ずないんですが、その時もやはり野村先生にお願いしたんです。野村先生は喜んで来て下さつて、そして全部処理して下さいました。そして一緒に食べたんです。私は

勿論食べません（笑い）。

まあ、野村先生のあんな優しいところに、どう言うこんな強さがあるのかと思ひますけれど、本当に神様がそれぞれに賜物を与えて下さつてゐる事を思ひますですね。そう言う思ひ出が非常に深くあるんですけど、就中一番私は、そう言う野村先生の優しさとそして内にある強さ、それはおそらく信仰によつて与えられたキリストにある強さだと思つたんですね。先程、正野さんがおつしやつたように、本当に自分の弱さをよく覚えて知つてゐる方、自分の汚れ、罪人である事の姿をわきまえて、そして神様の恵みにあずかつて罪許され生かされてゐると言う喜びと感謝をもつておられた。謙遜と感謝の人であつたと、私の非常に大きな印象ですと言ひますのは、野村先生が何か自分の事情、境遇、事柄について、つぶやいたり、嘆いたり、悲しんだりという事を一度もお聞きした事がないんですね。いつも感謝しておられた。喜んでおられた。この事を私はいつも本当に心に刻みこまれております。伝道会の後で胸を打つて骨折なさつた時も、本当にまあよほど気の毒だと、私は申し訳ないと思つたのです。集会が終わつて、オルガンの上に今花がありますが、あの花を教卓の方に動かそうとした時ですね、花を持って一寸足を後に引いた時、足を引っかけた感じがしたんですね。あの時野村先生があれをしなければ良かった、私がそれをしていたら良かったの

ではないか、そばに居たものですから気になって仕方がないんですね。でもその事を決して野村先生はつぶやいたり不平におっしゃった事はありません。むしろ感謝しておられた事を、お伺いした時に、深く私は野村先生の心にあるものが何であるか、それを思うよう教えられた気が致しました。

この事を私自身いつも思い出しては、謙遜と感謝の人であったその姿をいつも心に思い浮かべて、鏡として心に置いてある次第であります。今日はどうもありがとうございます。

(追記)

この伝道会は、平成二年十二月二日の事でございました。

私は、佐世保の甥の結婚式に前日土曜日から出かけたのです。主人を置いて行く事はとても気掛かりだったのですが、大丈夫だから行ってきなさいと言うので、お祈りして出かけたのです。そして、土曜日夜、電話して元気である事を確かめ、日曜日に式も終わって、弟達は、めったにない機会だから、もう一泊できないかと薦めましたが、それはできないと帰途に就き、夜八時過ぎに帰宅しました。ところが、主人の帰りが遅いので、よほど話し込んでいるのかなと思ったり、少し心配したり、ああお祈りしようとしたところ、林兄の車

で送って頂き帰ってきた主人は、ちよつと元気なく、転んで胸を打ったと言いながら、そろそろ上がって来たのです。

皆さんに心配かけてしまつて。私が、打った箇所を見た時、骨折しているとわかりました。私が行かなければよかった、こんな事にならなかつたのにと、瞬間頭に思いが走りました。お父さん骨が折れていると思うよ、病院に行こうか？でも、今晩は遅いから明日まで我慢できるね？

主人は、明日でよい。寒くもあるし、家にあつた湿布を貼つて眠れない夜を過ごしました。私が居ればよかつたね、と言えば、全て神様から出た事だから神様が癒して下さいよ。

唯々神様に望みを置いて待ち望みだけです。考えれば、骨は意外に早く繋がりました。しかし、コルセットを締めるのが苦しく、ゆるめにしていたのと、先生から立派に繋がっていますと言われたとたんにはずしてしまつたので、次第にずれていったようでした。

でも、そんな状態でも、平成三年のメッセージを書かせて頂いた時、イエス様は例年よりさつと書かせて下さつたよ、一遍で書く事ができたから楽に書けた。主はすごい力を下さるねと、一人でとても喜んでおりました。

(野村 美恵子)

野村さんを偲んで

廣田 寿



……ベレー帽のとてもよく似合う
おしゃれな方でした……

(平成八年九月十六日 記念会にて)



九月十六日 記念会と感謝

野村 美恵子

『主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみは
としえに絶えることがない。』

(詩篇一一八・二)

天の御国に召されて行った主人と、しばし別れて、いつの
まにか五年も過ぎておりました。カレンダーを捲っておりま
すと、今年はその年と重なった曜日でした。

平成三年九月九日 月曜日 召天

平成八年九月九日 月曜日 五年目

この五年間、私にとって、いつのまにか過ぎてしまった過
去と言ってしまう訳には参りません。私はどんな所から掘り
出されたのか、今日あることを深く思い始めると、止まるこ
とがありません。私のような者がこんな幸いな生涯に入れら
れているとは、十字架の御血のゆえに罪を許して頂き、もは
や神の子として下さっているゆえに、主は御真実を尽くして、
こんな賤しい者を今日まで育て下さっているのですね。

私が一人暮らしになる以前から、主はその備えをなして下
さったと今知ります。それは、

『あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあな
たがたを選んだのである。』(ヨハネ一五・一六)

主が選んで下さり、その主は、信仰の全く無い私を主人に預けて下さったのですね。その時から、既に準備の始まりだったのだと今は思っております。いろいろな通された路は、全て準備期間で、嬉しい事も苦しい事も、そこを通らなければゴールには入れない路、感謝して通れば案に通れる、そして主を知るすばらしい幸いを得させて下さる大切な路でした。一年を過ぎた時も五年経った今も、変わる事なくいつも主と共に居て下さいます。また、そこに主人も居る、目に見る事ができなくても、何かとても自然であるのです。私はこんな恵みに満ちた生活を日々備えて下さる主に、心から感謝の壇を築き、この所から、また心新しい出発をさせて頂きたい。

先生、奥様をはじめ、兄弟姉妹方の祈りと、本当に弱い私を、現実に蔭にあつて何かと助けて頂き、お世話になつていらっしゃる皆様と共に、主に感謝を捧げる記念会を開いて頂きたいと祈つて参りました。自分があれこれ計画を立てようとすると気が重くなつてしまいます。悪い癖で、すぐ首をもたげる自分に勝つ事を主は教えて下さいました。全て主にお委ねする事ができた時、主が御手を動かして下さい、何もかもスムーズに運び、主の祝福を頂いた事も私にとって喜びでありましたが、思いがけなく、福岡から和義先生がお出で下さつて私達のあまり知らない楽しいお話しをお伺いさせて頂き、本当に有り難うございました。

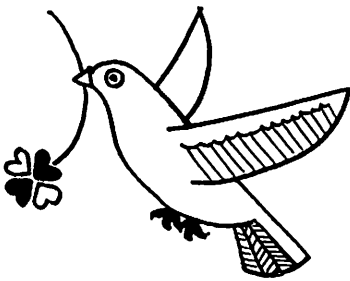
これからどれだけあるのか分からない残された日々を主の御計画に従順にお従いして行きたいと願っております。

『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる。』

(Ⅱコリント一・九)

主に購われ救いに入れられた恵み、その上に日々御愛の中に居らせて頂いている。十分過ぎるお恵みの中におかれていることを忘れやすい私に主人が教えてくれる事は、自分の物は何も無い、全部主から頂いた物だという事と、彼がいつも救いの原点を見つめて自らを律していたと思う事です。

感謝。



十てがみ十

◎クリスマスおめでとうございます。

寒くなりましたが、先生には、クリスマス、年始とお忙しい日々をおすごしの事と存じます。

限りない主の御恵みのもと、お元気に、豊かな祝福を頂いておすごしのことと、およろこび申し上げます。

心ばかりですが、日頃の御恵みに感謝をこめて、神様と檀本先生へお献げものをお送りします。

どうぞお体をお大事に、新年聖会を無事果たされますようお祈り申し上げます。

私達もおかげ様でひどい病気をすることもなく、毎日感謝の日々を過ごさせて頂いております。

神の御心に添うた悲しみは、悔いのない救を得させる
悔改めに導き、この世の悲しみは死をきたらせる。

II コリント七・一〇

今日このおことばにめぐりあい、救われた身のありがたさをかみしめております。

雄二が逝って五年が、十二月九日になりました。
神の御名をあがめ感謝申し上げます。

◎神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。
(伝道二一・一三)

主のお恵みを感謝します。

いつも週報を送って下さりまして、ありがとうございます。

週報を見るたびに、ああ私のような者も覚えていて下さっているんだなあ、気に留めていて下さるんだなあ、大きな喜びに満たされます。

毎週土曜日のFEB Cのおあかしも聞かせていただいております。

皆さん、とても良いおあかしをして下さいますので、同感したり、共に恵みにあずかったりしております。

毎週土曜日を楽しみにしています。

感謝の気持ちとして、切手を少し送らせていただきました。

少ないですが、主の御用に用いて下されば幸いです。

では、お風邪などひかれませんように。

一筆、お礼まで。

かしこ

◎榎本先生、百合子先生

長い間ご無沙汰をいたしまして申し訳ありません。

その間、「ぶどうの木」や増刊号などをお送りいただきながら、お礼も申し上げませんでしたことをお詫び申し上げます。

又、今年は先生の米寿のお祝いのお喜びを申し上げる機会も逃してしまいました心苦しいばかりです。

あらためて、米寿のお祝いを心からおめでとうございました。神様の御祝福に依ってこそ、八十八才になられた今も御健在で、主の御用に当っていらつしやいますことを感慨無量に思います。神様がみそば離れずにお守り下さいます様にお祈りしています。

さて私共の事ですが、今年は多難な年でしたが、こうして又、家族そろってクリスマスを迎えることが出来て感謝に絶えません。四月に主人が膵臓癌と診断されて以来、家族一同、共に死の影の谷をさまよって参りました。主人が癌にかかろうとは夢にも思っていませんでしたし、とりわけ至難な膵臓癌にとりつかれようとは、それこそ想像もつかないことでした。余りの恐ろしさと主人の苦しみに、私は毎日泣いてばかりでした。それでも神様の御慈悲にすがって、一日一日を支えられ、ここまで至ることが出来ましたことが、すでに奇跡のようです。

空のすずめのように、又、野の百合のように、一日一日を生きる毎日でした。今年は又、暑い夏でしたが、四月から六月迄の一ヶ月半の入院で衰弱しきった主人には、すこしの微風も冬の寒風のように耐え難く、高熱を引きおこす始末なので、冷房を入れるどころか、窓を全部閉めきって一夏を過ごさねばならない状態でした。高血圧症の私が、熱気の為に先に倒れるのではないかと思っておりました。

この様な中で、ハンナは主人と一刻でも一緒に過ごしたいと、ウインザーからトロント大学の法学部に転学し、朝夕主人を慰めております。お陰で今年は、久しぶりに家族が皆揃って、励まし助け合って過ごしております。

主人の診断が、ちょうど学期末試験の時でしたが、事態の余りの重大さのために、サムエルは主人の病床から一時も離れない決意をし、試験を受けなかったため、大学の学籍失格となりました。「ママ、勉強はいつでも出来るよ」、と私を慰めてくれていました。後に主人が、このことを知って大変落胆したことは言うまでもありません。(サムエルは、昨年、トロント大学の工学部に入学しましたことは、お知らせしましたでしょうか。)

死の影の谷をさまよっている主人の病床をとりかこんで、皆でお祈りをささげている時は、神様が手のとどかない遠くにいらつしやるようで、一体私達のお祈りを聞いて下さ

っているのだろうか、不安になりながらも、どうぞ御慈悲によって助けて下さいと、祈りつづけておりました。こうして家族揃ってクリスマスをお祝い出来て、唯神様の一方的な御愛のかたじけなさに、家族一同ひれ伏して感謝をささげております。多難な年でしたが、ハンナもサムエルも、今年が生涯最良の年だったと言っています。神様は、道のない所に道をもうけて、ここまで導いて下さいました。どうぞ主人の癒しの為にお祈り下さいませ。

— F —

◎御無沙汰ばかりいたしておりますうちに、早クリスマスも過ぎて、あますところなくわすかになってまいりました。本当に、いつものこと乍ら御無沙汰ばかり致しまして申しわけもございません。先生、奥様には、御元気で過ごしておりますしやいますか。御伺い申し上げます。

御説教テープや週報を毎月毎月、本当に有り難うございます。心から有り難く御礼申し上げます。FEBは、私の方には電波が入らないそうで、残念に思いました。楽しみにしておりましたのですけれども。

こちらの信愛教会は、本年三月に、おひげの岡崎先生が神

戸の須磨教会の方へ転任なさいました。岡崎先生は、同和問題、部落差別問題に力を入られた方で、部落解放劇には自ら出演してお役者さんになられたりされました。四月から後任の森下先生が来られました。奥様と可愛い坊やが一人います。坊やは一才五ヶ月で、最近歩き方もしっかりして、本当に可愛らしいです。久しぶりに牧師館が何とも明るい感じでございます。

御説教テープを早く御返送いたさねばなりませんのに、いつもいつも遅くなってしましまして、本当にあいすみません。腰痛症がひどく、台所に小さい椅子をおいて休み乍らするものですから、夕方などそんなに忙しくはないのに、さばけないで、おそくまでごそごと大切な夜の時間をつぶしてしまつて、早く御説教テープを開きたいと思いつつ時間ばかり過ぎてしまいます。けれども、最近、いつとはなく挫骨神経痛が大変良くなりました。楽になり喜んでおります。リウマチと言われている手指の方はだいぶ変形致しておりますけれども、格別に痛むこともなくて、機能障害もなくて、何でも出来ますので、本当に感謝、感謝でございます。院長先生はいつも、リハビリがんばんなはれやと申されますので、リハビリには真面目に通っております。患者さんの多いこと、待ち時間の長いことに、全くいやになってしまいます。

早くから御手紙を書こう書こうと思ひ乍ら、こんなにおしつまつてから申しわけなく思つております。腰が曲がつて、とぼとぼしておりますけれども、今一度北九州には出て行きたいものだと思つております。

新年聖会を心からお祈り申し上げます。

かしこ

十二月二十七日

— T・M —

◎尊い御名を崇めて讚美いたします。

榎本先生、いつも尊いお祈りをありがとうございます。

先日、聖会のテープを通して恵まれ感謝です。

先生の、聖霊に満たされた説教を聞かせて頂けるお恵みを感謝しています。

一月六日の日、愛する兄弟姉妹を送つて下さり、共に感謝、讚美の時を与えられました事を、心より感謝します。

日々に、聖書の尊い御言葉を通して、自分の弱さ、愚かさ、汚さが示され、言葉また力をなくす時があります。このよ
うな者だからこそ神様が選んで下さり、大きな大きな愛に心から感謝します。

榎本先生、弱い魂の為にお祈り、また、ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

寒さが増してきましたが、お体をご自愛下さいませ。目しい、耳しいの者の手紙をお許し下さい。

感謝しながら、今日はいこれにて失礼させていただきます。

これは、ほんの気持ちです。お受け取り下されれば幸いです。主の祝福がさらに豊かになりますようにお祈りさせて頂きます。

感謝しながら失礼いたします。

ありがとうございます。

— K・T —

◎三日間の豊かな恵みを感謝致します。

神様のご臨在の証しをさせて頂きます。

思いがけず奏樂の御用をさせて頂き、ありがとうございます。神様からせよと言われ、はいと答えたものの、ほとんど知らない曲（弾いたことのない）の為、自分の考えで、拡大コピーのある曲をと思いつつ、皆様に祈つて下さいとお願ひし、オルガンの前に座りました。ところが、与えられた曲は三四番。歌ったこと、聞いたことのない曲。一小

節目を見ると、4—4のリズムに楽譜が合わず、メロディ
—がとれないと見ているうちに、神様は祈りに答えて、先
生のお話しが始まり、「あわてないで、ゆっくり終りまで
見なさい」と、イエス様の声が聞こえ、時間が与えられて
いるうちに、大きく拡大したコピーまでととのえて下さい
ました。

祈りに答えて下さる聖霊を信じて祈り、聖霊によって御こ
とばを聞き、生命と力を頂き、神様を知る勝利の一年を送
りたいと願います。お祈りいただきます様お願い致します。
一九九七年一月三日

— M・A —

◎とうとい聖名を崇めたてまつります。

先生、私は駄目になりました。こんな事を申し上げて、い
たずらに先生に御心配をおかけして申し訳ありません。体
は本当にどこと言って悪い所無く、保っていたいただいており
ますのに、かんじんの中心が駄目になりました。もうろう
といたしております。でも、お恵みで、主人はしつかりさ
せていただいておりますので、すっかりよっかかっており
ます。人生の最後の段階に、このような事が待ちかまえて

おりますとは！

残念でございますが、このままのマイペースで進むよりほ
か、致し方ございません。どうぞお覚え下さり、折りにふ
れてで結構でございます、祈ってやって下さいませ。御奥
様も或いはこのような傾向であられるのでは？と思っ
りもいたしますが、………お大切に下さいませ。

新しい年の尊い御用の御上に、尚溢れる御祝福お祈り申し
上げつつ、後になりましたが、和義先生御夫妻様に御よろ
しく。先生の御用の御上にも、いや増し加わる御祝福をお
祈り申し上げます。

一月六日

— K・T —

◎尊い主の聖名を崇め奉ります。

先生、御奥様、聖会も豊かに祝され、又、私共まで満たし
ていただき、感謝申し上げます。

今年もどうぞ、お祈り、ご指導、宜しくお願い申し上げま
す。

尊い主の御許しと御あわれみにより、主人も、「外なる人
は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく」。

言葉の出る時と出ない時もありますが、出る時は、主よあわれんで下さいと、お祈りしています。声の出ない時も口は共にお祈りし、又共に讚美します。そして、もう何も言う事はないと言ってます。そして、お話しよりもお祈りをと催促します。先日も友美と一緒に見舞った時、主にある者が親であり兄弟であると、霊の交わりを覚えて、とても喜んで涙ぐんでました。又、帰りの車中で友美が感謝するのです。今まで、五体満足で元氣旺盛な人が、健康で、一番幸せだと思っていたけど、神様を知らない、信じない人程、あわれな人だね。たとえどんな境遇におかれても、心から主を讚美出来る人こそ、本当に健康な人ですね。健康でも病気で、どちらでも良いのだ。唯、何時も神様を感謝讚美出来る人こそ、最高に幸せだねと、私達はこうして叔父さんのお見舞いに行くけど、叔父さんのためではなく私のためだと言う事がよくわかりました。神様、感謝しますと、讚美しながら帰りましたが、休日の日の前夜等は、うちに泊まり込んで共に讚美し、お祈りさしていただき、又、目しいの様な耳しいの様な私共でも、呼びさまされる思いがします。

先のが後になり、後のものが先になり、聖言通りです。そして、友美がにこにこしながら言うのです。「私ね、よく榎本先生が御説教しておられる夢を見るの。もったいな

くてね。お祈りしていただいているからよ。感謝だね」と。そして、共に讚美するのです。生くるかいもなしと讚美にあるように、本当に、取るに足らない者達を今日まであわれみ、来世へのかけ橋を主が共にあって、如何ともしがたい者を、許し、あわれみ、御旨にそうよう、ふさわしい者と造りかえつつあるのだなあと、しみじみと教えられ、しめされ、心から感謝讚美申し上げます。

『わが義人は、信仰によって生きる。』

『聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」と言うことができない。』

『聖霊を受けよ。』

年頭から、命の聖言、感謝讚美奉ります。

善にして善をなし給う主に感謝申し上げ、今日これにてお別れします。

有り難う感謝申し上げます。

アーメン

— M・E —

ワラシハヒツゴイノコヲイヨクマワリ
松竹梅の三才の力を合せて感じに作り出す。

サイキンワラシハゴタイガヤゴキニクナリマシタ。カミサマニ
最近おれも竹梅の三才の力を合せて感じに作り出す。

ニナリマシク。テンゴクハヒツゴイニヨイトロデス。コハヒツサキヤナヤミクワクワトハ
大正十一年三月三日は昨日一日に過ぎぬ。

ヒツモアリマセン。エイエンニツヅク、エン(ラクエン)デス。コハカミサマヲ
ウチにすくも、水は流す南風(うらみん)の音は林檎と

信仰する人なきたが、この人が身をもたす。戦果を

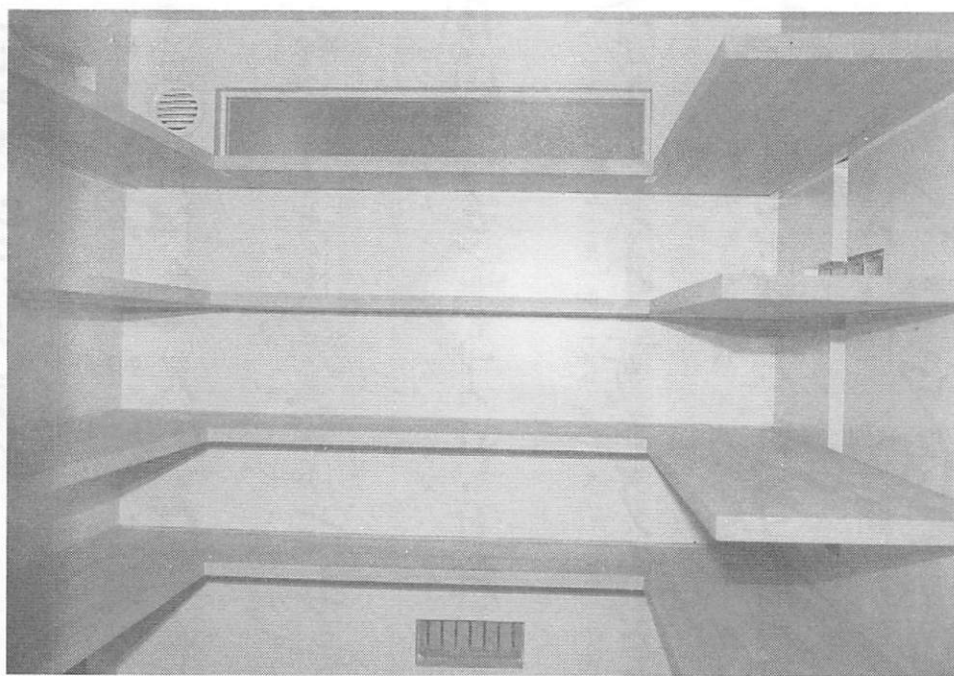
後いひしに、カミサマヲシニコクスル。ヒツタナゲケガハイルコトガデキマズ。
後いひしに、カミサマヲシニコクスル。ヒツタナゲケガハイルコトガデキマズ。

城
白夜

(一九九七年一月二日夜本人自筆の文章に比ぶるは、たまたまです)
同年十二月三日日野天



新納骨堂



納骨堂内部

1997年 新年 聖会





編集後記

◎ 「ぶどうの木」第二十四号をお届けします。

◎ 今号は、遠方におられる兄弟姉妹からのお便りを紹介しました。

◎ 私達は、遣わされている所は違っても、同じぶどうの木に繋がる枝です。

◎ 神様が、その枝にふさわしい実を豊かに結ばせて下さっていることを教えられ、感謝します。